

Title	プラトン對話篇「テアエテトス」
Sub Title	
Author	星野, 重顯
Publisher	三田哲學會
Publication year	1933
Jtitle	哲學 No.11 (1933. 9) ,p.75- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000011-0170">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000011-0170</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# プラトンの對話篇「テアエテトス」

星野重顯

## 一. テアエテトス篇の内容。

プラトン對話篇「テアエテトス」の研究対象はプラトンに取つて根本的な意義をもつてゐる智識 *ἐπιστήμη* の概念規定である。此處では個々の智識——勇氣、友情、徳——の研究やその枚舉は問題ではない。智識の種々相を共通なる概念に集めて (*συνάγειν εἰς εἶν* 147 D, *εἰς εἶδος* 148 D.) 智識そのもの (*ἐπιστήμη αὐτὴ* 146 E.) の何んたるかを問題としてゐる。「智識、認識とは何んぞや?」(*τί σοι δοκεῖ εἶναι ἐπιστήμη; 146 C, ἐπιστήμη τί ποτε τυγχάνει οὖν; 145 E.*) が此の篇の主題である。

ソクラテスは先づテアエテトスに「智識とは何んぞや?」と質問し、哲學の根本問題考究に進んだ。かくて他のプラトン對話諸篇とはその趣を異にして終始一貫、智識、認識そのものゝ研究に終つてゐる (*ἡ δὲ αὖ ἐπιστήμη αὐτὴ τί ποτε ἐστίν.* (146 E.). テアエテトスはソクラテスの智識の

何んたるかの質問に答へて、幾何學、天文學、靴製造術、及その他の術、所謂特殊科學を以つて智識の定義とした。然し概念規定(定義)の場合に特殊科學を數へあげる事は問題ではなく、凡ての特殊科學、凡ての智識に共通なる特長、概念を提出する事に重點がある。理論的に言へば、誰とても智識の何んたるかを知る事なくしては幾何學、天文學の如き科學が智識、認識なるかを知る筈がない。 *οὐδὲ γὰρ ἐπιστήμη ἐποδημάτων συνίστην ὁ ἐπιστήμην μὴ εἰδώς. οὐ γάρ.* (147 B). 青年テアエテトスは直に自分の方法の非學的なる事を知り、智識の第一義、智識は知覺に外ならず」*οὐκ ἔλαο τι εἶσθιν ἐπιστήμη ἢ αἰσθησις* (151 E). をもつてソクラテスに答へた。151 D—187 Bの章に此の第一定義の批判がなされてゐる。

テアエテトスの「智識は知覺に外ならず」の命題に依れば吾々に智識を招來するものは感覺的知覺のみである。此の主張は自然にプロタゴラスの「人は萬物の尺度である、あるものゝ如何にあり、なきものゝ如何になき。」*πάντων χρημάτων μέτρον ἄνθρώπων εἶναι, τῶν μὲν ὄντων ὡς ἔστι, τῶν δὲ μὴ ὄντων ὡς οὐκ ἔστιν.* (152 A) との所謂 *Homo mensura* の説に導かれる。即ち人間は凡ての判断の真或は偽の尺度である。かく若し人間が萬物の尺度であるとすれば、個人の感覺に依つて個人に見える様に物が存在すると言ふに外ならぬ。かくて知覺と現象とに同じものを異つた見地から見て二様に命名した迄である。 *παντασία γὰρ καὶ αἰσθησις ταυτῶν* (152 C)。故

にテアエテトスの智識の定義とプロタゴラスの命題とは同一のものであると言へる。さてプロタゴラスの命題に依れば物の性質については吾々は普遍妥當なる智識を得る事は不可能であつて常に智識は個人をその源泉としたる主観的なものである。したがつて彼の主張は又ヘラクライトスの萬物流轉の説を再建するものである。ヘラクライトスの理解に従へば自から存在するもの *An sich Seienden* については一般に何等語る事が出来ないと言ふのは何物も存在せずして凡ては絶へず生成してゐるものであるから。此の理論は一般に日常の経験が既に吾々に示してゐる所であつて、感覺的領域に於ても又精神的領域に於ても運動が生命を静止が滅亡をもたらししてゐる。吾々は凡ての印象をば五管と知覺する主観と、知覺されるものとの間に生づる運動との會合に依つて感づる。此の同じ運動も常に他の主観、或は異なる時間に同じ主観に起つた場合には又異つた印象を起させる。而して凡て存在するものゝ相對性、或は絶へざる運動にあるとの此の學說に依れば、あらゆる知覺される對象は常にその状態を變化してゐなければならぬ。然し一般に絶へず運動してゐる場合に吾々の感官が果して知覺に達し得るや否やは疑しいものである。指で把み得る所のものをそのまま眞に存在するものと考へるが如き人は之のアポリアを重要視しなかつたが、然し洞見に富めるプロタゴラスは既に此のアポリアに氣附てゐた。凡てのものは永遠の運動の状態で理解はされるが、その運動に能動的なもの

と受動的なものとの二種あつて、前者は知覺プロノイアや或は感覺に作用し、後者は此の作用を受け取る働をなす。此の二つの要素が合致する事に依つて初めて知覺されるもの(白)と知覺するもの(視)とが生づる。知覺は *das agierenden Objekt* と *das regierenden Subjekt* との會ふ瞬間に出づる。かくて物は自分の性質を初づ自分の作用、或は作用を受ける事に依つて保つが、之等は知覺するもの、性質に應じて變化してゐなければならぬ。知覺する主觀はその働は *νοεῖν* であつて知覺されるものに應つて初めて存在し、知覺される物はその働は *καθ' ἑαυτὴν* であつて、その性質を知覺する主觀に依つてのみ有する。實にプラトン自身の言葉をもつて言へば「それ自身にするものは何物もなく、他のものへの關係に於て生づる、而して實在は根本から驅逐される」*οὐδὲν εἶναι ἐν αὐτῷ καθ' αὐτὸ, ἀλλὰ τιμὴν δεῖ γίνεσθαι, ……* (157 A. B.) 而して「凡てのものは運動し、之以外には何物もなし」*τὸ πᾶν κίνησις ἢ καὶ ἄλλο παρὰ τούτο οὐδὲν* (156 A). *κινῆται καὶ δεῖ, ὅς ποτε, τὰ πάντα*; (182 C.) のである。夢見たる人や、狂者や、病人の知覺を眞なるものと言ひ難いとの非難に對しては、かゝる状態で知覺した人々は彼等の知覺と物との結合に際して健全なる人や、醒めたる人の場合とは異つた結果を引き起すと答へる。而して健全なる人々の知覺は知覺する人自身の本質に屬し、何等の誤謬をも許さぬからして、知覺は知識である。かくの如くプラトンはヘラクライトスの流動説と、プロタゴスの感覺主義と、知識と知覺とを同一なりとするテアエ

テトスの定義と同一なる事を簡単に説明して、然る後に之等の説に批判を下してゐる。此の證明の非科學的なる事は勿論プロタゴラスの目を遁れぬものである。又吾々は外國の言葉や文字を、それを理解する事が出来なくても、聽いたり、見たりし得る。従つて知覺は知識ではないと言ふ第二の異議に對してはテアエテストは吾々は此等の外國語や文字の意味内容を知らずしても、此が知覺の事實であるとして理解し得るとして拒絶してゐる。然し次に吾々は以前の知覺を記憶に依つて呼び起す能力をもつてゐる。之の事はプロタゴラスも承認しなければならぬであらうが、然るに彼に依れば吾々は知覺に依つてのみ智識に至るのであるから、記憶の場合には一矛盾が生ずる。即ち吾々は記憶の場合には知つて居り又同時にそれを知らぬわけである。勿論此の異議の非科學的なる事をプロタゴスも洞見して、劇しくソクラテスの考へに反對した。即ちソクラテスは記憶の状態と知覺とを不正にも同一とする事に依つて前の様な反對論をしてゐるが、然し此等二つのものは事實全く異つてゐる。知覺の場合には凡ての存在物に關する彼の相對説は成立する。又此の説に依れば智者と無智者との區別の如きも等閑に附するわけには行かぬ。或る知覺が他の知覺よりも眞であるのではなく、知覺はそれ自身直接に確なものであるが、然し或る知覺が他の知覺よりもよいものでは有り得る。

170A—179Cの章に於てはプラトンとソピストとの眞面目な論争が取扱れてゐる。吾々に見

える正にその様に物があり、眞理と誤謬との間には何等の差異もない、と言ふプロタゴラスの主張に反對する効果ある理由として、プロタゴラスが自分の言葉で此の見界が正しいものでなければならぬと人々の考へを此の方に變へしめる事が、も早プロタゴラスの命題と矛盾するとの論理が考へられる。吾々は生涯中に、知より外の何物に依つても吾々から區別し得ない、一事件の指導を委任し得るが如き人を求めてゐる多くの人を見出すし、又教育し、命令する人々をも見出すかくの如く多くの人の考へに依れば智と無智、眞理と誤謬との間に差異が存する。然もプロタゴラスの説に依れば自説に矛盾する反對説をも眞理とせねばならぬから自説自から消滅するが如き矛盾を生づる。かくの如くプラトンがプロタゴラスの感覺主義に一大鐵鎚を下したが之にも満足せずして次に未來の事實を論じて之を破らんとした。プロタゴラスの命題は未來が決定を呈へる所の有效、有害の概念に於てもその反對を受ける。凡ての判斷の相對性を認めるプロタゴラスの命題は、よし現在の知覺並に正、不正、敬虔、不敬虔の概念を取扱つてゐる時には正しいものとしても、此が未來の事、それが得であるとか或は損であるとかに關しては眞僞の多少に差別が生ずるのは争ひ難い事實である。

172C—177Eの章に於てはプラトンはプロタゴラスの相對說批判を一時中絶して、哲學する者と非哲學的一般市民との比較を花々しく描寫してゐる。政治家は若い時から、心使いと阿諛と

を事として、多くの人や自分の曲げられた考へに依屬して、己の思量を萎縮せしめ、自分の取扱つてゐる事の取るに足らぬ事である事に依つて心を小さくし、不正直にし、彼から眞直な、自由な本質を盗みとつてゐる。が之に反して哲學するものは民衆の恩惠などには惱されず、自分の精神力を思考の範圍にのみ限つて、實に自分の肉體は國家にあれども、その精神は飛揚翱翔して地上のもの、地下のものを量り、天上の量を量り、全體としての萬物の性質を尋ね、何物にも屈服せぬ。幸福の神的なるものと、不幸の非神的なるものとの此の二像が世の中に作られてゐるが、人間はその内のどちらか一つの像に、自分の行動の道德的性質に従つて似るものである。が哲學するものは常に不正から離れ遠いて、正義の理想に努力してゐる。(バイドン篇を参照せよ)。

一見無用の如くに見える此の比較からしてプラトンはプロタゴラスの感覺説に反對する第三の理由の敘述を導き出してゐる。プロタゴラス自からも未來の事の價值判斷には智と無智との差異がある事實を認めなければならぬとすると、未來の事に關しては、萬物の尺度となるものは單なる人ではなくして、知れる人、智者でなければならぬ。プロタゴラス學説の妥當範圍は、一には眞理に於て同じ要求權をもつてゐる意見が對立する事と、二には古來の事に關してゐる意見に差異があると云ふ事實の此の二理由でもつと重要な點で制限されてゐる。然し知覺と智識とを同一にする事の不可能なる事が形而上學的にはまだ證明されてゐない。 *idea* の範



國に於てはプロタゴラスの感覺説が維持されない事は證明されたが然し此が刹那的な感覺の世界にも妥當するか否かに尙斷定を必要とする。之の斷定に至るためにプラトン<sup>1</sup>は彼の論鋒をプロタゴラスの命題の前提となつてゐるヘラクライトスの萬物流轉説に向けた。何んとなればプロタゴラスの學説にして若し正しきものならばプロタゴラスの學説も亦一部の眞理を藏する事になるから。

ヘラクライトスは運動の絶對性を要求した。主觀も容觀も凡てのものは場所の變化 *ἄλλοι* と性質の轉化 *ἄλλοιότης* との此の二種類の運動に支配されてゐる。此の二種類の運動は萬物の負はねばならぬものであつて、只一種の運動のみを認めて、他の運動を否定すれば吾々は運動と靜止とを同一の物に認めなければならぬ、と言ふのは運動には必ず二種類の運動があるから。然しヘラクライトスの此の學説からは知覺されるものと知覺するものとの逢合——此の逢合からプロタゴラスに依れば知覺が結果して來る——が不可能である事がわかる。何んとなれば時間的にも性質的にも絶へず變化してゐるなれば、少しの間も相方共に同じ状態には存在せぬ、かくて運動の逢合 *ἄλλοιότης ἄλλοιότης* は考へられず、従つて又知覺の可能も許されない。絶對的運動説に従へば、或るもの *Εἶναι* を見たと言ふ事は或る他のもの *Εἶναι ἄλλοι* を見た事である。又存在するものがないのであるから、何物も見ない事にもなる。不幸にも吾々の用語中には知

覺の妥當と非妥當とを同時に言ひ表し得る言葉は相悪く一つも見當らぬ。かくて智識と知覺とを同一となすプロタゴラスの説を基礎づける筈のヘラクライトスの學説は知覺一般の成立を不可能にした。

以上の如くにしてプロタゴラスの感覺説はその前提を奪い取られ、その説の無効なる事を曝露した。此の證明は他の精神活動から獨立して知識ではないとの消極的な結果に達した。然して次には知覺と知識とを同一とする *αἰσθησις* = *ἐπιστήμη* テアエテトスの定義を *ἐπιστήμη* に討論してゐる。此の場合プラトンはテアエテトスの命題を拒絶する事にのみ限らずして、反つて智識の本質について吾々に暗示を呈へ、知覺に智識過程中の適當な地位を呈へ様としてゐる。五官は吾々に知覺を媒介する道具に過ぎない *οἱ δὲ ἕκαστα αἰσθανόμεθα* 184C であつて、知覺の直接的な支柱ではない *καλλὸν ἢ οἴσ. sc. ἕκαστα αἰσθανόμεθα* 1. C 吾々の物を見音を聽くのは、眼に依つて耳に依つて、見且つ聽くのである *ὁρᾷται γὰρ ἀπόρησις ποτέρα ὁρατότερα, ὁ ἀρᾷται τοῦτο εἶναι ὁρατότατον, ἢ οἱ οὐ ἀρᾷται, καὶ ὁ ἀκούομεν ἄρα, ἢ οἱ οὐ ἀκούομεν; ② ΕΑΙ. Δὲ ὅτι ἕκαστα αἰσθανόμεθα, ἐμῶς δόκει, ὁ νόσφιστες, καλλὸν ἢ οἴσ. (184C) かくの如くプラトンは「*ὁ*」(woman) と「*οἱ*」(womich) とを峻別して、吾々が「*οἱ*」に依りて「*οἱ*」知覺する所のもの即ち感官は悉く身體に屬するものである。多くの知覺があつたとしても、之を一イデアにするもの吾々の五官では*

なくして、心 *νοῦς* である。此の心の道具としての五官に依つて吾々は初めて知覚し得るものを知覚するのである。肉體に屬してゐる五官はその性質に従つて只一種の知覚のみを媒介する。例へば聽覺—耳—は音を、視覺—眼—は色を媒介する。多くの感覺的知覚を綜合し、或は多くの知覚の同、不同を比較する事等は五官には不可能な事である。如何なる感覺も此の様な事は出來ないのであつて、此等の事は心に依つて初めてなされる。感覺は他の異つた感覺からは引き起される事はないし、又自分の感覺についても何等の判断をも下さない、と言ふのは感覺は他の異つた感覺には無關係であるし、又従つて理解も出來ないから。例へば音は聽覺に依つてのみ、色は視覺に依つてのみ知覚されるのであつて、他の感覺をもつては知覚されるものではない。存在、同、不同、似、不似、一、多、美、醜、善、惡等の如き個々の知覚を超越した概念は、多くのものを共に理解し得る働をもつ心に屬したものである。さて眞理と存在 *ousia* とは離す事の出來ないものである。又眞理と智識、認識とも一つものである。然るに此迄の説明に依つて知覚は *ousia* を確め得ない事がわかつてゐるから、知覚は智識ではない、従つて智識に關してのテアエテトスの定義は間違つたものである。これを以つてプラトンはテアエテトスの第一定義、智識は知覺に外ならずとの批判を終つて、第二の定義に論歩を進めてゐる。

(註) テアエテトス第一定義については、鹿子木員信博士「哲學的理想主義の誕生」哲學雜誌(第三三卷)

三七一號)並に理想主義的惡戰(大正十五年)を参照されたい。又プロタゴラスに關しては田中英知太郎「プロタゴラス」ホモ、メンストラ「命題の一解釋」思想(第七十五號)昭和三年を参照されたい。

智識は知覺には求められず、それが存在するものに働いてゐる限り心の働に求めらるべきものである。以前に異つた言葉で言ひ表されてゐた心の此の高尙な熟慮する心の働は此處(187B—201C)に於ては *σοφία* なる語で言ひ表されてゐる。然し正しきドクサと偽れるドクサ *δοξα ἀληθής*、*δοξα ψευδής* とは區別されねばならぬから、正しきドクサは智識なり *πιστευέειν ἢ ἀληθὴς δοξα ἐπιστήμη ἐστίν* (187B)と第二の定義がテアエテトスに依つて呈へられた。*δοξα* の譯語として *Vorstellung*, *Meinung*, *Ansicht* 等があるが、之等三語もギリシヤ語の *δοξα* の意味を充分に表してゐるとは言へない。之の語は眞理と誤謬との仲間にある不定な主觀的な心の働を示すものである。(ドクサについては後章にて論ぜられる)。普通には之語は *Vorstellung* の譯語を用ひてゐるが、此の論支中に於てはギリシヤ語そのままドクサを以て表される。

先づプラトンは正しきドクサに先立つて誤れるドクサのアポリヤに手をつけた。誤れるドクサの討論は既に早くよりプラトンに於ては問題となつてゐたものであつたが、此處にその研究の好期を見出したわけである。且つ又誤れるドクサの存在は既にテアエテトスの第二定義に依つて認められてゐるものである。何んとなればテアエテトスはドクサを以て智識とは考へ

ずに「正しきドクサ」を智識なりとしてゐるから。

プラトンの考へるには、吾々は先づ第一に *Lernen* と *Vergessen* との過程を特に注意して見て、吾々は或るものを知つてゐるか或は或物を知らぬかの二つの可能な立場がある事を知る。かくて問題を主観の立場から見ると誤れるドクサの起る場合は次の如き四つ考へられる。

- (一) 意識してゐるものを他の意識してゐるものと考へる。
- (二) 或る意識してゐないものを他の意識してゐないものと考へる。
- (三) 或る意識してゐるものを或る意識してゐないものと考へる。
- (四) 或る意識してゐないものを或る意識してゐるものと考へる。

然し四つの此の立場は共に不可能である。(一)(三)(四)の場合には吾々は常に吾々が知つてゐるものを同時に又知つてゐないと言ふ矛盾が生づる。(二)の場合には同時に二つのものについて何事も知らぬものを吾々が取違へたり考へ違へをしたりする筈がない、デアエテトスもソクラテスも知らずして、吾々がデアエテトスをソクラテスと考へたりソクラテスをデアエテトスと考へる事は出来ない。

吾々が此の問題を客観の立場から明にし、存在と非存在の對立から出發するなれば、誤れるドクサは存在するものを存在しないものと考へるか、或はその逆に存在しないものを存在するも

のと考へるかにある。然し吾々は或るもの *ὄντι* 又は或る存在するもの *ὄντι* を考へるが存在しないもの *ἄντι* は考へられない。 *ἄντι* を考へると言ふ事は一般に何物も *ἄντι τὸ παρὰ τὴν 189 A* 考へない事である。(然しプラトンはソヒスト篇 258 E. 263 に於て *ἄντι* は考へられる。即ち他在 *ἔσθ' ἑνταῦθα τὸς ὄντος* としてと語つてゐる。) かくて此處に於ても誤れるドクサは生じないわけである。

さて然らば物の取違へ思ひ違へ *ἀλλοδοσία* が誤れるドクサであらうか? 此の考へにも同じ様な矛盾が生ずる。ソクラテスは此の事をドクサは心の自分自からの對話 *λόγος εἰρημῆτος* であると説明する事に依つてテアエテトスに知らしめてゐる。心は自分自身に美は醜であり、不正は正であり、牛は馬であると言ふ事は出来ない。即ち *ἀλλοδοσία* が生ずべき筈がない。吾々は心の聲なき會話に於て何にか知つてゐるものについて語らねばならぬ、此の場合 *ἀλλοδοσίῃ* が起るとすれば、知つてゐる筈のものを知つてゐない事になる。

所で *ἀλλοδοσία* については尙考へなければならぬ事がこのこつてゐる。それは現在の知覺と知覺の記憶の關係について考へられる。彼は一つの神話をもつて之の關係を示してゐる。ミューズの母なるムネモシネの賜物である蠟板 *μάζων ἐπιμαέτων* が吾々の心にあつて、之は或る人の大きなものであり、又或る人の小さいものであり、此處では美しきものであり、彼では

汚れたものであり、甲には硬いものであり、乙には軟いものであるが、然し共に初めは *epithelēsa* であつて、此の蠟板の上に吾々の知覚する凡ての對象の像を刻み込んで置くのである。而して之の像が蠟板中にある間は知つてゐる(記憶してゐる)のであつて、此が消えたり又は刻み込まれる迄に至らなかつたものは忘れられたものである。即ち知つてゐないのである(記憶がない)。かゝる假定の下に誤れるドクサが起る場合が考へられる。即ち、その印象が既に蠟板に刻印されてゐる對象、知つてゐる所のもの(がもう一度新らしく知覚される場合に、心の中の此の像に關係しない)で、此とは合はぬ所の意識の藏にある記憶の像と關係した場合に、誤れるドクサが生じる。

*allosōsia* はかくて記憶像と知覚とが出逢つた時に生ずる。ソクラテスは誤れるドクサの生ずる二重の根據をかくて知つた。(一)廣い且つ不明瞭な知覚の場合に心が速に記憶の像と知覚とを正しき關係に置く事が出来ない場合と、(二)蠟板があまりに硬かつたり、あまりに軟かつたり、不純であつたり、あまりに小さい空間しか持つてゐなかつた場合には、その記憶像が以前から知覚には適合してゐなかつた場合とである。

誤れるドクサは知覚と記憶の像との *allosōsia* であると言ふ事は説明されたかの様に思へる。然し此の種の誤れるドクサ以外にも尙誤れるドクサが存在する。即ちそれは思惟 *ἐπινοία* に於てである。かゝる誤れるドクサは感覺的なものにあるのではなく、心の再現力に依るもの

である。七と五の數を觀念として持つてゐる人が、その二數の合計を尋ねられて十二である所を、誤つて十一とする。——かゝる事は合計すべき二數の數が多ければ多い程起り易いものであるが——。之の事は如何にして起るのであるか？ソクラテスは此のアポリアを *ἐπισημαίνει* の *νεκρήσθαι* と *ἐξείναι* との區別を立てる事に依つて説明される。説明を易からしめんために彼は心と鳩小屋とを比較してゐる。吾々が鳩を鳩小屋に入れてゐた場合、吾々は鳩を *νεκρήσθαι* してゐるが *ἐξείναι* してゐるのではない。此處で鳩を *ἐξείναι* するためには吾々は鳩を手で把む必要がある。吾々の知識も丁度此の様なものである。吾々は教育や研究に依つて多くの知識を *νεκρήσθαι* する。然し此等は吾々にとつて常に *gegenwärtig* であるとは言へない。即ち吾々が此等を *ἐξείναι* してゐるとは言へないのである。此等の知識を *gegenwärtig* ならしめ、*ἐξείναι* するために精神的再把握が必要である。此の場合鳩を再び見出す場合と同様に誤つて捕へる事がある。かくて吾々が求めてゐる智識をありのままに見出した時には、吾々は *ἐπισημαίνει* *ὁὐκ ἔστιν* をもつ事になり、求めてゐる智識のかほりに他のものを捕へた時には *ἐπισημαίνει* *ὁὐκ ἔστιν* が生じて、誤つてドクサゼインする。然しソクラテスは *ἐπισημαίνει* の *νεκρήσθαι* と *ἐξείναι* との區別では満足する事は出来なかつた、と言ふのは此の區別は吾々は同じものを同時に知り又知らぬと言ふ矛盾——前の説明に於て使用された——をどうする事も出来ない。吾々は既に知つてゐるものをどうして



誤つてドクサゼインし得るか、又どうして知つてゐるか、或る物を同様に知つてゐる他の物と  
 間違へ得るかは理解し難い所である。と言ふのは *ἐπιστήμην* を *κεκρίσθαι* から *εἶναι* にする  
 その時にも吾々の心は働いてゐるからである。プラトンは此のアポリアを解うとして、彼は吾  
 々の心の内、鳩小屋には *ἐπιστήμην* のみならず *ἀπιστήμην* も、正しき觀念も、誤れる觀念も  
 飛び廻つてゐて、之等を捕へる場合に誤つて *ἀμαρτανῶν ἐκβρέσιον* 志たものを外して後者を  
 捕へる事に依つて誤れるドクサが生ずると考へた、それは恰も左右を間違へて足袋を履く様な  
 ものである。然し此の考へは又最初のアポリアに出逢ふ。何んとなれば、二つのものを知つて  
 ゐて、一方のものをその他のものと考へる事は出来ないし、又智と無智とについての第三の智識  
 が必要となつて来て、所謂堂々廻りを初める。かくてプラトンの幾多の努力にもかゝらず結  
 局結論として吾々は智識の何んたるやを知らずしては誤れるドクサの本質を知るを得ない事  
 になつた。

*ἐπιστήμην* と *ἀλήθης ὁδὸν* とを同一視するテアエテトスの定義は尙討論すべき點をのこして  
 ゐる。此の定義は日常の經驗を引證する事に依つて否定されてはゐるが、然し正しきドクサ  
*ὅτις ὁδὸν* は存在する、勿論それは智識ではない。例へば裁判の場合に於ては、辯護士は確信を作  
 る事をその任務としてゐる、此の場合に辯護士はかゝる確信を説得に依つて作り、教へる事に依

つて作るのではない。即ち辯護士は裁判官にドクサ——正しきドクサ——を醒しめるが、智識を醒しめるものではない。

以上に述べられた様にテアエテトスの第二の定義がプラトンに依つて否定せられ、テアエテトスは此處に第三の定義を提出してゐる。それはテアエテトス一人の意見ではなく、アンテステネスの主張してゐたものである。即ち第三の定義とは *επιστήμη* と *ἐπιπέδη δόξα μετὰ λόγου* とを同一のものと見るものである。此の第三定義の討論が第三章 (201 C—210 A) で行われてゐる。ソクラテスはアンテステネスの此の定義を既に以前より知つてゐたものゝ様であつて、その説明にもアンテステネスと同様な立場で行つてゐる。即ち此の説に依れば、最初の要素、原成分 *πρωτεία*——此の原成分から凡てのものが合成される——には何等の *λόγος* もない。吾々は此の原成分には存在とか非存在とか量とかの性質を負はず事は許されぬ、只命名されるのみである。之に反して原成分の合成されたものゝ即 *συλλαβαί* には *λόγος* が適合する。*συλλαβαί* は詳細なる判断に依つて説明され得る。かくてロゴスをもつてゐない *ἀνευ λόγου* 合成物の智識を有する人は眞理を有すると雖も未だ *επιστήμη* をもつてゐるとは言へない。例を文字に取るなれば *Πλάτῶ* なる文字に於て *Πλάτῶ* は説明されるが *P, L, a, t, o,* なるアルファベットの一つ一つは只 *π, λ, α, τ, ω* 等と名づけられるのみである。さて *συλλαβή* を部分の總計であるとしたならば、

次の如き矛盾が生ずる。即ちその全體を知つてはゐるが、その個々の部分を知らない。或は *οὐκ ἔστιν* *ἄλλο* を要素から出来上つた特別なもの——それは自分特有の本質と自分特有の姿とを自らに持つてゐて、*τροχία* とは異つてゐる——とすれば、此の要素は部分としては理解するわけには行かぬ。若しかくの如くなれば *οὐκ ἔστιν* は此れの部分の *ὅλον* 以外の何物でもない。*ὅλον* と *μέρος* との間には區別は認められない——此の兩者共に何物をも缺いてゐないから——従つて *οὐκ ἔστιν* はその部分の凡てとして理解される。さて再び *οὐκ ἔστιν* を部分からは出来ない統一ある姿 *ἰδέα ἀνεπίστος* とするならば、*οὐκ ἔστιν* は *τροχία* の概念となつて了つて、<sup>ストイキ</sup>原成子と共に認識されぬ運命を負ふ事となる。

乍然 *τροχία* の認識不可能の説は吾々が學問する際に取る方法に論及する事に依つて否定される。原成分<sup>ストイキ</sup>は吾々が學に至る前に既に充分知つて置かねばならぬ所のものであつて、原成分の智識はそれの結合されたものよりも遙に明晰であり判明である。

第三定義の客観的側面の此の説明の後に、プラトンは *λόγος* ——此のものが附加する事に依つて正しきドクサが智識となる筈である——の概念を研究してゐる。*λόγος* には次の如き三様の意味が考へられる。

(一) *λόγος* は名詞 *ὀνόματα* と動詞 *ρήματα* に依つて作られた言葉で思想を解釋するもので

ある。かくて第三定義は Erkenntnis ist richtige Urteil mit Sprechen. となる。正しきドクを以つてゐて、之を言葉で發表し得るものは智識をもつてゐる事となる。然しながら、以前の説明に依れば正しきドクサは智識ではなかつた、且又ロゴスを音聲上の表現となす事に依つて、ロゴスがドクサに智識を請合ねばならぬとすれば、ロゴスの此の説明は智識の正しき概念に導き得ない。と言ふのは正しきドクサはロゴスの附加する事に依つて何等の變化も受けないから。

(二) ロゴスは物の各構成要素の智識である。然しロゴスを此の様に解するも、ロゴスが何等智識を請合ぬ事は以前の文字の例に依つて明である。θεῖντοςをの<sup>と</sup>をもつて書いた者は明に此の固有名詞のストイケイアを知つてゐる、それにも拘らず θεῖντοςなる名を前のテアエテトスと同一なるにも拘らず <sup>Te</sup>をもつて書き得る。筆者はストイケイアの<sup>と</sup>とを良く知つてゐる、然しながら彼は θεῖντοςなる名の場合の全く特殊な利用中にのみ之を知つて、之のストイケイアの結合法則は知つてゐない。部分の智識は誤謬を防ぎはしないし、又之を智識とは言へない、たかだか正しきドクサである。ロゴスを θεῖντος δια γινώσκωνとする第二の意味も正しきドクサを智識となし得る様な何等新しい規定をもつけ加へない。

(三) 例へば吾々が太陽を天上地上に於ける凡ての物の内で最も輝くものとして、説明する時の様に、ロゴスは物を他の凡てのものから識別する所のもの、即ち *ἡλιακός* と考へられる。若し

此の如く考へるなれば *ἀληθὺς ὁβία* は或る對象の個有な本質、特別な目標例へばテアエテトスの人格の如きを現さずして、テアエテトスが他の人と共に持つてゐる規定のみを現してゐるわけである。或るドクサが一般性を表象し、且又それが或る對象を他のものから區別するものに關係してゐる時に、そのドクサは正しいと言われる。ドクサが正しからんためには識別力が必要なわけである。かくて正しきドクサに差異性を言ひ表すロゴスが附加しても、智識概念の説明に何等の進歩をも認められない。蓋し、正しきドクサに既に此の意味のロゴスの働があるからである。かくて正しきドクサは智識ではないとの以前の説明がそのまま、此處でも適用する。

然しロゴスは *charakteristische Merkmal* の學的智識としたらどうであらう。ロゴスを此の様に解する事に依つても、智識のアポリアは解けない、と言ふのは第三定義は次の如くなつて意味のないものになつて了ふから。 *ἐπιστήμη = ἀληθὺς ὁβία μετ' ἐπιστήμης*

以上の如くテアエテトスの三種の定義は凡て智識の説明とはなつてゐない。かくて此の對話篇に於ては、智識の何んたるかは積極的には知る事は出来ない、然しその暗示とも見るべきものは隨處に此を見る事が出来る。プラトンはその初期の對話篇に於てソクラテスをして皮肉にも、余は何事も知らぬと言ふ事を知つてゐる、と言わしめてゐるが、此の無知の智は即ち此の對話篇の結論になつて了つてゐる。吾々が知つてゐないものをも早知つてゐるとは思はぬ、と言

ふのが結論となつた。

以上に於てテアエテトス篇の内容を簡単に物語つたわけである。此の篇は見るが如くに完結されたものでなく、その主題となつてゐる智識の探求には到つてゐないが然し一般に多くの人から智識と思はれてゐるものを批判し、否定しながら、一方に於て智識の概念に多くの暗示を呈へてゐる。

此のテアエテトス一篇はプラトンの他の諸篇と比較して先づその統一ある事が目立つて見える。即ち少しの前提とも見るべきものゝ後に「智識とは何んぞや」との主題を提出して、定義を出し、その批判、他の之に關する學說の批判と論理的にその論歩を進めて、三通の定義の智識の何んたるやを知るに足らぬものなる事を示してゐる。此の一篇を通じて智識のみをその目的としてゐる、かくの如く一主題をのみプラトンが論じてゐるのは愛を論じてゐるシンポジオンと此の篇とを外にしてはない。然し一篇の調和を問題とする時には恐らく此篇に優れたものはなからう。プラトンは先づ一八四B—一八七Cに於て第一定義の直接的な否定をしてゐる。此以前にプロタゴラス、ヘラクライトスの學說を批判してゐる。二〇〇E—二〇一Dに於て偽れるドクサの問題の討論に依つて第二定義の否定をなし、終に二〇六C—二一〇に於て第三定義の否定を行つてゐる。此以前に第三定義の創始者 Antisithenes の考へを述べてゐる。此等三章は

打ち破られぬ思想形列をもつて結び付けられてゐる。知覚は智識ではない、何んとなれば心の中にはその對象についても、又その生起の方法についても全く感官には無關係な働があるから、同様に又正しきドクサも又智識ではあり得ない、何んとなれば説得術に依つて、智識ではない所の、正しきドクサが作られ得るから。又正しきドクサにロゴスを附加しても、一方内容上何物も正しきドクサに附加してゐないし、又他方智識の性質上にも何等變化を呈へてゐない。かくの如く智識本質のアポリアは此の篇に於ては全く消極的であり批判的である。然し Steinbart (§. 24) は此篇の問題は知覚やドクサが精神の必然的法則に依つて漸次智識となつて行くのを證明しようとする所にあると考へてゐる。且又 Susemihl (ss. 207) はロゴスの最後の意味——第二の意味に於ける暗示と結びつけて——に智識の積極的な本質を見出してゐる。Eben hiernit ist nur aber auch bereits angedeutet, dass doch in dieser letzten Bedeutung des Wortes λόγος auch bereits, verbunden mit den in die zweite hineingelesten Hinweisungen, das positive Wesen der Erkenntniss Ausgedrückt liegt. 然し此の考へは、此の對話篇の研究は何等より良き結果を得なかつたと明に言つてゐるソクラテスの言葉と矛盾するものである。更に又精神が表象を漸次純化し、靈化する事に依つて眞理の認識に達すると或る論者の考へも此の篇からは決してプラトンの思想としては證明されない、只此の考へはプラトン著作の比較的後期のものゝ内に言つてゐる考へを運び入れた間違つ

た考へである。就中、積極的なプラトンの中心思想をプラトンの言葉のみから取らうとする努力はプラトン研究者をしてプラトンの言葉のみを抜き讀する様に傾かしめる、かくして公平な研究少しも發見されない。かゝる解釋の仕方を用ひた大多數の人は、此の篇に於て智識の積極的な説明を見出さない。Bonitzがその一人であつて次の如く言つてゐる……kein Recht zu sagen, dass in der negativen Kritik und durch dieselbe auch eine positive Erklärung über das Wesen des Wissens in Platonischen Sinne gegeben sei (ss. 91) 又他にイデア説がプラトンのテアエテトス篇に於ては無言の内に又用心深く前提されてゐると考へる研究者がある。此の研究者等はテアエテトス篇をイデアの存在證明を間接的な、分析的論戰的な説明形式で打建んとする目的をもつた對話篇中の一として、テアエテトス篇の一般的な意義を定めようとする。特に Ribbing がそれである。彼は自分の此の考へを非常な努力をもつて正しいものとして證明せんとした。彼はテアエテトス篇の目的を次の様に見た。Die empirische Erkenntnistheorie aus allen Gesichtspunkten zu analysieren, um dadurch die subjektive Notwendigkeit und Bedeutung der Ideen indirekt aufzuweisen. (Bd. I. ss. 139, Anm. 279) Schmidt も次の如き見方から推して Ribbing と同じ考へを抱いてゐる。Welche Definition gemeint ist, kann nicht zweifelhaft sein; denn da sich in dem Gespräche weder Wahrnehmung noch richtige Vorstellung noch endlich Begriffsbestimmung als genügende Definitionen erweisen, so bleibt als die Plato vorschwebende und



seinen Philosophie angemessene kein andere übrig, als eine auf die Idee, s. h. auf die Wirklichkeit des Begriffs oder das ihm zu Grunde liegende wirkliche und wahrhafte Sein gerichtete. (ss. 83). 勿論プラトン<sup>は</sup>他の對話篇に於て智識をイデアに關係せしめて、吾々が前生に於て見てゐるイデアを精神が想起すると言ふ<sup>アナムネシス</sup>想起説に依つて認識論の諸問題を説明したのであつた。又シユミツトの考へる様に吾々はテアエテトス篇全般に於てイデア説への暗示をその背景に見出し得る、特に此の暗示はテアエテトスの最後の部分に於て示されてゐる思考の内に或る程度に見出し得る、が然しその解決は讀者に此をまかして了つてゐる。Michelis (ss. 192) は *εἶδος* と *ἰδέα* との二つの語が使用されてゐる事は、此の秘せられたるイデア論の正にその反對を表現してゐるものである事を讀者に注意してゐるが、之は正しいものであらう。此の兩語共に *Art* とか *Form* とかの普通の意味に使用されてゐる。184 D に於て多くの感覺は *ἴδαν τινα ἰδέαν εἶρε ψυχῆν εἶρε ὄρι δεῖ καλεῖν* にて組合されると言つてゐるが、此の篇に於ては少くとも重要な章に示されてゐる此の點については Zeller (ss. 66r, Ann. 4) が Ritter に反對してゐる様に、吾々はイデアの嚴密な哲學的意味には取らずに、此の語の軽い、不定な意味に考へるべきであらう。テアエテトス篇の批判的、否定的なるものゝ裏に孤立的なプラトンが意識的に制したるイデア論が存在すると考へるために、吾々は更に此の對話篇全體の明なる論争的性質を無視してかゝらねばならぬ。此の事

は最も明に 154 B-187 C の章に表れてゐる。此處では知覺は智識であるとの定義を積極的に否定してゐる。知覺はそれに相應する器官を持つてゐなければならぬ。然し吾々が種々の感覺の區別や又それ等を総合的に理解するものは何んであるかをプラトンは考へた。かくて之等の事をなすものは個別的な感覺器官ではなく、それ自からに依りて考へ、觀る所の超感覺的なもの、即ち精神であるとプラトンはなしてゐる。個々の知覺を超越して生ずる存在、同一、差異、類似、非似等の概念は、凡てのものを総合的に理解する事の出来る精神自からの働に屬するものであるとプラトンは考へた場合に、吾々は然らば精神は如何にしてかゝる概念に達し得るか？とのより廣い質問を期待する。然るにプラトンは他に於ては之の質問に對して、前生に於て觀たるイデアを想起するとの説に依つて答へてゐるが、テアエテトス篇に於ては之に關する何等の痕跡をも見出せない。プラトンは此の對話篇に於ては超感覺的な智識の存在する事の證明だけで満足してゐる。かくて此に依つて所謂第一定義を否定してゐる。かくて再び智識問題の何んたるかを求めんとして論を進めた。此の所で否定の限界が破られたのは正しい事である。然し此の事は多くのプラトン研究者が兎角考へ易い様にイデア論の對立に依つて生じたものではない、イデア論については何等の痕跡も見出し得ないのである。只吾々は此の章に於ては知覺は智識でないとの消極的な否認の補充を超感覺的領域に於て求められる智識への暗示に見出

す。公平にして、注意深き讀者は此の章に於て Ribbing (s. 15c) と同時に、多くの、雑多な、相對的な存在物以外に自存的な、純一な、けがれなき存在、プラトンのイデア概念を構成する存在について、の證明を見出さないので、只こゝで彼等は、純一な、非物質的な精神と承認しなければならぬ必然性の説明を見出す。適當な方法でプラトンは此處で意識の統一性を、吾々が種々の知覺を結合し得る事實に論及する事に依つて説明してゐる、而して之と共に唯物論的な世界觀に反對してゐる。プラトンが此處で純粹な否定的立場を見捨て、積極的に吾々が認識に達し得る範圍を示した點に於て、此の章はテアエテトス篇の最高頂を示してゐるものである。然し、此の積極的説明は智識に關する第一定義に對して論争せんとする目的を持ち、又此の説明の方法は、此の説明の背後にあるプラトンのより發展したる哲學を見るを妨げてゐる。かくて此の説明の結果は全對話篇の進行に於ては智識問題の解決に利用されてゐない。

此の對話では知覺も正しきドクサも又概念規定も智識本質の不十分な定義として證明されてゐるとしても、吾々は之をもつて必然的にプラトンのイデア論に決して追いやるべきではない。此の對話篇の計畫中には吾々が想起説と結びついたイデア論に依つて此の問題を解き得るが如き事へは少しも論及してゐない。プラトンが後の對話篇にて導き出し、基礎附した説に依つてなされる解答を委ねたとは考へられぬ事である。にも拘らず此の對話篇には知覺及ド

クサからは全々異つた智識の對象への時々暗示には缺けてゐない。——にも拘らず此の對話篇全體は消極的なもので終始してゐる。此の消極的批判にプラトンの智識本質の積極的説明が呈へられてゐるとは然し考へられない。かくて吾々は此の篇からは多くの哲學内容は得られない——多くの研究者は之に反して之の篇に多くの内容を期待してゐるが。

乍然此の篇の消極的、批判的な性質からして、直に此の篇の價值を見下げたり、意義のないものと考へるべきではない、昔から引きつがれて來た考へや、所謂ドクサに反對して自分の學說を主張し、基礎付けんとするには先づもつて、自分の說に反對する批判が必要であつて、此の一篇は智識の何んたるやは知るを得なかつたが、決して價值なきものでない。之の事はプラトン自身も最後(210C)に言つてゐる所である。

(二) 誤れるドクサについて。

テアエテトス篇中に尙考ふべき幾多の問題が残されてゐるが今暫くそれ等をおき、此處にテアエテトス篇を中心としてドクサに就いて考へて見よう。

先づプラトンがドクサに下した定義を見よう。彼はテアエテトス篇一八九E—一九〇D Aに於て、精神は自分自からと語り、自分自からの問い又或は答へ、自から肯定し、否定する、之を吾々は靜なる、反省的な精神の自己一人の聲なき會話、考察、或は思慮 *διανοεσθαι* oder *διενοεσθαι* と言ふ。

かくて此の思慮の結果精神は一つの決定に至り、決定的な「然りか否か」を言ふ。此の精神の思慮活動の結果がドクサである、と言つてゐる。此と殆んど同じ様にソヒスト中にドクサを精神の肯定、否定に於て表れる思惟の完成されたものとして定義してゐる(二六三日)。然しドクサは聲なき、無音の會話であるとするは二篇共に共通した考へである。かくの如きプラトンの考へより推して見るにドクサは *Schein Vorstellung Meinung Ansicht* などとするよりも寧ろ *Urteil* の語に適合する様に考へられる、少くともテアエテトス篇に於ては *Vorstellung* の如き包括的な意味を有する語よりも適切なものである。然しプラトン對話篇全體に渡つてゐるドクサを表す場合は後者の語は最も適したものであらう。かくの如くドクサを一つの精神作用の判断と考へるなればドクサには正しきものと誤れるものとの二様のドクサが存在する。然して正しきドクサ *ἀληθὴς δόξα* と誤れるドクサ *ψευδὴς δόξα* とを區別する所の規準 *κρίτηριον* も又考へられる。かくてプラトンはテアエテトス篇に於て此の三つの問題を研究した。

プラトンは正しきドクサが智識と異なる説明を誤れるドクサの存在する事實から證明しようとした。若し正しきドクサが既に智識であるなれば、誤れるドクサの可能性は説明されない、と言ふのは精神的産物たる誤れるドクサは正しきドクサから區別するに困難であるから。かくて誤れるドクサ即ち誤謬の成立如何を研究した。

此の誤れるドクサの説明のために三つの研究がなされてゐる。

(一) 智識と無智との両方に各々対象があるとプラトンは假定して(一八八A—一九〇E)

(二) 誤れるドクサは記憶像とそれに相當する知覺との間との不正な結合、不正な關係だと定義して(一九一A—一九六D)

(三) *ἐπιστήμης ἔξις* と *ἐπιστήμης κτήσις* (das Haben der Erkenntniss und das Erworbenhaben der Erkenntniss)との區別から誤れるドクサを定義して(一九六D—二〇〇D)説明されてゐる。

(一) は之を又三つの區別して

(イ) 吾々がドクサゼイン(或はドケイン)する場合には、吾々の知つてゐるものをドクサゼインするか、又或は知つてゐないものをドクサゼインするかである。然し同じものを知つてゐる時に知らぬと言ふ事、又同じものを知つてゐないで知つてゐると言ふ事は不可能であるからして、誤つてドクサゼインする人は

(A) 知つてゐるものを

(a) 他の知つてゐるものと思ふか。

(b) 知つてゐないものと思ふか。

(B) 知つてゐないものを

(c) 知つてゐるものと思ふか。

(d) 他の知つてゐないものと思ふか。

である。先づ知と不知の見地 (*kata to sisevai ni hito sisevai*) から見れば誤れるドクサの成立する四つの可能な場合が考へられる。然し此の可能に見える四つの場合には決して誤れるドクサは成立しない。(b)の場合に於て、吾々は二つのものについては何物も知つてゐないのであるからして、従つて一つのを他のものと考へるなどと言ふ事は出来る筈ではない、他の(a)、(b)、(c)では吾々が知つてゐるものを實は知らないものであつて、つまり吾々は或るものを知つてゐると同時に知つてゐない事になる。(一八八A—C)

(ロ)、(イ)の場には主観的な立場から説明されたのであつたが、此處では客観的に説明されてゐる。即ち立場を非存在と存在にもつて來た (*kata to eivai ni hito*)。ドクサゼインするとは存在するものをドクサゼインするのであつて、誤つたドクサは存在しないものをドクサゼインする事であるかも知れない、然しドクサゼインする事は本來或る存在するもの、有をドクサゼインする事に外ならないであつて、非有をドクサゼインする事は出来ない、無をドクサゼインするとは何物もドクサゼインしない事である。従つて此處に於ても誤れるドクサの成立は許されない事になる。(一八八C—一八九B)

(ハ) 此の場合にはドクサの對象の結合に誤れるドクサを見出そうとした。即ち誤れるドクサとは思ひ違ひ *anadodia* である「甲の有」を「乙の有」と違つてドクサゼインする場合に生ずる。所が此の甲と乙を思ひ違ふ場合には此等のドクサを同時にもつか又は順次にもつかでなければならぬ。然るに同時に甲乙をドクサゼインするものは甲を乙とする事は出来ないし、順次にドクサゼインする人は甲をドクサゼインしてゐる場合には乙のドクサをもつてゐず、又乙をドクサゼインする場合には甲のドクサをもつてゐないから甲を乙とする事は出来ない。然らずんばドクサをもつてゐないものにふれる事になるから。(イ)の(a)を参照(一八九C—一九〇E)

(ニ) 此處では有名な蠟板 (*καλλιγραφία*) の例を引き、プラトン認識論に大きい暗示を呈へながら、誤れるドクサは記憶像(知)と知覺との不正な結合であると考へる。人に依つて呈へられた蠟板の良否は異つてゐるが、吾々が知覺したものは皆な此の蠟板に刻されてゐるのであつて、吾々は此の刻印を思ひ起し得るのである。所が蠟板の良否如何、何印刻の場合の如何、時期の長短如何等に依つて蠟板上の刻印が明瞭であつたり不明瞭であつたり、又は確乎としてゐたり、矛盾であつたりする。かくて忘却とは此の刻印の消失する事である。かくてプラトンは十四の誤れるドクサの不成立の場合をあげてゐる。次に表示するものがそれである。



I. Im Gebiete des reinen Wissens

beim Zusammentreffen von

1. Wissen ohne Wahrnehmen mit wissen ohne Wahrnehmen,
2. Wissen ohne Wahrnehmen mit Nichtwissen ohne Wahrnehmen,
3. Nichtwissen ohne Wahrnehmen mit Nichtwissen ohne Wahrnehmen,
4. Nichtwissen ohne Wahrnehmen mit Wissen ohne Wahrnehmen ;

II. Im Gebiete des reinen Wahrnehmens

beim Zusammentreffen von

5. Wahrnehmen ohne Wissen mit Wahrnehmen ohne Wissen,
6. Wahrnehmen ohne Wissen mit Nichtwahrnehmen ohne Wissen,
7. Nichtwahrnehmen ohne Wissen mit Nichtwahrnehmen ohne Wissen,
8. Nichtwahrnehmen ohne Wissen mit Wahrnehmen ohne Wissen ;

III. In der Vereinigung des Wissens und Wahrnehmens

beim Zusammentreffen von

9. Wissen und Wahrnehmen mit Wissen und Wahrnehmen,

10. Wissen und Wahrnehmen mit Wissen ohne Wahrnehmen,
11. Wissen und Wahrnehmen mit Wahrnehmen ohne Wissen;

IV. Wenn weder Wissen vorliegt noch Wahrnehmen erfolgt ist  
beim Zusammentreffen von

12. Nichtwissen und Nichtwahrnehmen mit Nichtwissen und Nichtwahrnehmen,
13. Nichtwissen und Nichtwahrnehmen mit Nichtwissen aber Wahrnehmen,
14. Nichtwissen und Nichtwahrnehmen mit Nichtwahrnehmen aber Wissen.

(Stoelzel Die Behandlung des Erkenntnisproblems bei Platon. 1908. SS. 97. und Horn, Platonstudien. N. F. SS. 192. Amm.)

此の十四の誤れるドクサ不成立の最初の三つには説明がつけ加へられてゐるが大して問題とすべきものでないからして、此の表示だけでその説明を終つた事とする。

乍然一九四Bに於て誤れるドクサ成立すると見るべきものを説明して、誤れるドクサは結局思惟と感覺の結合する所に *εἰ τι συμβαίνει κινήσεως πρὸς ἀναγωγήν* 生ずるとしてゐる。即ち誤れるドクサは思惟と感覺との錯交、人が或るものをドケインした場合にそのドケインの的外れ、當の的ならざるものに當る時、恰も靴の左右を取違へ、或は左右逆になつてゐる鏡に於ける

視覚の様な時にその左右を取違へる時、又不注意に射る射手の様に的をねらひちがひして的外す様な外れする時、又誤つて當つた時、かゝる時に誤れるドクサは成立する。即ち誤れるドクサは *εσποδοσία* 又は *αλλοδοσία* である。かくて結論として誤れるドクサは感覺相互に於て生ずるものでも、又思惟に於ても生じるものでもなくて、思惟に對する感覺の結合に於て生ずるものである。が然し果して然るものであらうか？（一九五C—D）。

例を數に取つて説明すれば、吾々が思惟の内に於てのみ取扱ふ數の計算に於ては誤れるドクサは生じないものであらうか。此處に思惟の内にて七と五との合計を凡ての人が十二と思ふものではない、中には十一と思ふ人も多くある筈である。之は數が多くなればなる程この誤りは生じ易いものである。かくて純粹思惟中に於ても又誤れるドクサは生ずるものである事がわかる。かくて誤れるドクサは思惟と感覺との結合に生ずるとの承認も満足されない。

(三) 誤れるドクサを説明する第三の然も最後の研究をプラトンにかくて、智識を二種に區別する事に依つてしようとした。即ち智識の所有に二種あると考へた。智識をもつてゐる *ἐπιστήμη* と智識を手に入れてゐる、自家藥籠中のものにしてゐる *κεκρησθαι* との區別を置いた。 *κεκρησθαι* とは次の鳩の例にて判明するが、例へば着物を作つてもつてゐる場合の如きものである。それを着てゐないとしても、それを着ようと思へばいつでも着す事の出来る様な場合、又現在此

處に持つてゐないにしても、望む時に之を持つ事の出来る能力をもつてゐる事である。

さて、前論に於て蠟板を吾々の魂中に作つて例證したが、此處ではプラトンは一つの鳥籠——その中には種々の鳥が飛び廻つてゐる——を作つてゐる。然し此處ではその鳥籠中に鳥を入れずに智識を入れてゐる。かくて吾々の子供時代にはこの鳥籠は空であるが、漸次は吾々は智識を得た場合に之を之の籠の中に入れてゐると考へる。可然時には之の籠の中には多くの智識が飛び廻つてゐる筈である。かくて鳥籠中にもつてゐる智識は *κεκτῆσθαι* してゐると言へる。又 *λαβῆναι* に持つてゐるのである。之の智識を狩して吾々が再び手に入れるのは *εἶναι* するのであり、*πῶς* に持つ事である。

かくて籠の中に飛び廻つてゐる智識を狩りつゝ甲のかはりに乙を間違へて取つた場合、甲の智識を持つ事の代りに、間違つて乙の智識の場合、即ち十二なる智識の代りに十一なる智識をつかむ。場合。此處に誤れるドクサが生ずる。かくの如くして再び前の議論に返つて、智識をもつてゐるに、又之を知らぬと言ふ矛盾が生じて來て、誤れるドクサの説明にはならぬ。

此處でプラトンは鳥籠中に智識と言ふ鳥のみを置いた事が善くなつたと考へて、非智識 *ἀνοητοσύνη* も又鳥籠中に飛び廻つてゐるとした。かくて狩りをする人が時には智識を得、時には非智識を得て、一つ事について非智識をつかむ事に依つて誤れるドクサを智識をつかむ事

に依つて眞なるドクサを得るとした。

乍然智識と非智識とを智つてゐるものが如何にして間違つてつかみぞこないをするか？同様に兩方とも知らぬ者が如何うして知らぬ甲を知らぬ乙と思ふか？又知つてゐる甲を知らぬ乙と思ふ事が出来るか？逆に知らぬ甲を知つてゐる乙と思ふ事が出来るか？前出の議論に依つて此等は不可能なる事は明である。

かくの如くしてプラトンは智識そのものゝ何んたるかを知る事なくしては誤れるドクサの探求は不可能と考へるに至つた。

テアエトス篇に於ては智識問題と同様にドクサの研究に於ても消極的であつて、之以上ドクサの探求せんとすれば他篇に渡らざるを得ないのであるが淺學菲才の私には今許されない所であつて、後日ヒレポス、メノン、ソピスト篇の研究に待つ事とする。

プラトンのドクサに就て 杉正俊。(哲學研究 第一七卷 第百九十號。

「偽のドクサ」の成立について。副島民雄。(哲學雜誌 第四四卷 第五一三號。

Ihm. O, Ueber den Begriff der Platonischen  $\Delta O \equiv A$ . Leipzig. 1877.

Michelis, F. Die Philosophie Platons in ihrer inneren Beziehung zur geoffenbarten Wahrheit. Münster. 1859—60.

Susemihl, F. Die genetische Entwicklung der platonischen philosophie. Leipzig 1855—1860.

Ribbing, S. Genetische Darstellung der platonischen Ideenlehre. Leipzig, 1863—64.

Steinhart, K. Platons sämtliche Werke. Einleitungen Leipzig 1850—1866.

Bonitz' Platonische Studien 1886.

Zeller. Natorp, Lutoslawski, Ritter の 解説